

校長通信 その4

休校が延長になって早くも数日が過ぎました。幸い広島では新規の感染者はここ数日出ておらず、このまま感染者数が減少して予定通り6月から学校が再開できることを願いつつ毎日を過ごしています。

現在学校では、授業を動画配信できるように先生たちがいろいろと準備を進めてくれており、インターネットを見られる環境のある人たちは、一部の教科・科目について授業動画の視聴が可能となっています。自宅で見ることができないと先日の調査で回答した人には担任の先生から連絡があります。4月に休校に入ってから1か月が経とうとしており、朗報には違いありませんが、完全に一方通行のオンライン授業こそ、学ぶ皆さんの主体性が問われてきます。社会では「オンラインで授業を配信できるようになると学校の在り方が大きく変わる」などと言われることもあります。上手な活用に期待しています。

さて、皆さんが教科書や動画を含む補助教材を活用して、基本的な知識は各自で習得することが可能であると気付いたとき、

これからの授業は、本当に他者と同じ空間・時間を共有していなければできない活動が中心となっていくでしょう。実際、今回の新型コロナウイルスの問題が起きる前にも、社会は既に大きな転換期を迎え、学校にも変革が求められていました。次の一文は、昨年6月中央教育審議会に設置された「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ」の諮問文書の一部です。

このような急激な社会的な変化が進む中で、子供たちが変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手として、予測不可能な未来社会を自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を一層確実に育成することが求められており、それに対応し、学校教育も変化していかなければなりません。

学校教育をどう「変化」させていくのかを具体化しなければならないと考えていた矢先の、新型コロナウイルスの蔓延による長期間の休校。「待ったなし」の状況です。先生たちも授業の在り方や教師の役割を見直し始めています。青山学院大学特任教授の耳塚寛明氏は、学校教育は「知識受容型」から「知識生産型」に変わるべきであると言っています。上記の諮問文書の全文や、教育の変化が求められる社会変化については、文部科学省や経済産業省のHPで読むことができます。社会はどう変容し、今後その社会で求められる力は何なのか、学校の授業を通して皆さんがどのようにその力をつけるのか、登校がかなわない今こそ、ぜひ考える機会にしてみてください。

今日のひと言：学びの主人公は生徒、キーワードは「変化」です。



校内に紫蘭（シラン）の咲いている場所を見つけました。連休前に撮った写真なのでもう花の盛りは過ぎています。どこにある花かわかりますか？